

令和3年度 あおもりフィールドスタディ支援事業

SDGs11

青森よこまちつながるプロジェクト



青森中央短期大学幼児保育学科専攻科福祉専攻  
横内地区まちづくり協議会学生サポートチーム  
「チームまちゃみ」



青森中央短期大学

Aomori Chuo Junior College



# 目次

はじめに.....	1
プログラム1 権現様と街歩き 阿保真弥花 .....	2
プログラム2 花壇づくり 阿保真弥花 .....	3
プログラム3 花と緑のコンテスト 小山内唯嘉 .....	5
プログラム4 花と緑のコンテストー花摘みー 小山内唯嘉 .....	8
プログラム5 花と緑のコンテストーしおり作りー小山内唯嘉 .....	9
プログラム6 みんなの食堂 in よこうちー齋藤静奈 .....	10
プログラム7 チャピットお泊り会 十文字瀬菜 .....	12
プログラム8 花と緑のコンテストーほうきづくりー十文字瀬菜 .....	13
プログラム9 花と緑のコンテスト 花壇づくり 原子 恵 .....	14
プログラム 10 生き残り大作戦!!ー自宅避難訓練ー 原子 恵 .....	15
プログラム 11「令和3年度青森市学生ビジネスコンテスト出場」 「チームまちゃみ」横内地区まちづくり協議会学生サポートチーム ...	17
おわりに.....	18

# SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



出所:国連広報センター



はじめに

このプロジェクトは、SDGs11「住み続けられる街づくりを」を意識して考えました。SDGs(エスディーズ)は、「Sustainable Development Goals(持続可能な開発目標)の略称で、2015年9月、ニューヨークの国連本部で行われた国連サミットで採択された、加盟国193カ国が達成を目指す2016年から2030年までの国際目標です。そして、「誰ひとり取り残さない」ことが共通理念であり、地域に住まうひとり暮らし高齢者や後期高齢者の方のつながりの継続を目的に地域活動を考えました。

2019年末からはじまった、世界中の新型コロナ感染拡大は、今年も世界共通の課題として継続しています。感染予防で、人との接触を控える生活が今もつづいており、2021年「孤立・孤独対策担当室」が内閣府に設置されました。こうした課題を背景に地域のつながりを目指し、青森市横内地区で取り組ませていただきました。各プログラムは、既存の伝承文化に加え、ひとり暮らし高齢者の余暇の調査結果をもとに余暇の促進、共食、ICT 介護ロボットで介護予防、災害時の強化(自助力、共助力)と「学生の個々にもてる力」を考慮して、プログラム化しました。

実施方法も新型コロナ感染予防を中心に考え、集まらず訪問協力者と学生で訪問させていただきました。

地域活動させていただくには、学生の力だけではできなく、普段から関わりをもっておられる方々のお力をお借りできたから、実施につながったと感じ御礼申し上げます。また、この活動にご協力いただきました皆様に心から感謝申し上げます。さらに地域交流・協働から学生は地域で学び、今後の地域福祉に寄与する。

専攻科福祉専攻 齋藤雅美



プログラム1「権現様と街歩き」に参加して

**阿保真弥花** 専攻科福祉専攻

○「権現様」とは

権現様は、神様が仮の姿で現れた存在。権という文字は「権大納言」などと同じく「臨時的」「仮の」という意味で、仏が「仮に」神の形を取って「現れた」ことを示している。横内地区を巡りながら権現様は家の前で待っている住民の方の頭を噛み、「健康や勉強、幸福」といった願掛けを行う昔から地域に根付いた民俗文化である。昨年は新型コロナ感染予防のため実施が見送られ今年、小規模で実施された。

○参加して、参加者の反応など

毎年行ってきた伝統を繋ぐ意気込み、責任感のようなものを感じた。参加者は男性のみでしたが、男性だけで行うということが、よりその内輪の絆を深めていると感じます。地域で楽しみにしている人たちに向けた笑顔がとても素敵で、喜ぶ人がいるということが、この祭りのやりがいに繋がっているのだと思いました。自分たちが率先して行う活動であるという信念を感じ、権現様のパワーと元気をもらいました。

○魅力と課題

地域活動の種類によっては女性のほうが積極的に参加し、男性の参加が少ないというデータがあります。そのような中で、男性の方が率先して参加をする祭りが横内にあると知り、今回横内の伝統ある権現様の祭りに参加させていただきました。力や体力を使う作業が多く、男性だからこそ、といった祭りで今後の課題は、伝統を繋ぐ為に活動に意欲を持つことができる参加者

を増やしていくことだと考えます。

○まとめ（これからどのように活かしていきたいか）

これから人の生活を支援していく上で、伝統のある行事はその人の思いを聞く共通の話題になると思います。そのため、その地域の行事には積極的に参加し、暮らしに根付いた支援を行えるようになりたいです。

○参加者からの声

新型コロナ感染予防で毎年行われていたものが、一度は中止になってしまったが、この行事は伝統ある行事なので今年こそ行いたいと思っていた。感染対策の為に簡易的になったが、実際の権現様もぜひ見てみてほしい。これからも続けていきたい。



プログラム2「花壇づくり」に参加して

**阿保真弥花** 専攻科福祉専攻

○花壇づくりとは

青森市を花いっぱいにするという活動に、横内の婦人会の皆様が主に参加をして、花壇づくりを行っている。市から送られてきた花を植えた後は継続して水やりを行い、出来た花壇は自慢の花壇写真展として紹介されるなど、市の貢献に大きな活動で学生も参加させていただきました。

### ○参加して、参加者の反応など

どのように植えるか1から話し合い、位置を決め、協力して花壇を完成させていく様子が、横内の地域の強い絆と繋がりを感じさせると思いました。地域の皆さんは、不慣れな私たちを優しく迎え入れてくれて、植え方を教えていただき、話をしていくうちに花壇づくりの楽しさを実感し、参加者の積極的な姿勢から私たちもやりたいと思わせてくれる、モデルのような存在になっているのだと思いました。

### ○魅力と課題

権現様繋がり、横内には地域で花壇づくりを行っているを知り参加させていただきました。緑や花が綺麗に咲き乱れる横内の地域の方々や花壇づくりを行い、自分たちの得意なことを活かして地域に貢献している姿がとても眩しかったです。課題としては、重たい土を運び力仕事が多い、地区のいろんな年代の方にも参加していただき、婦人会の皆様の知恵を共有していきたいと思えます。

### ○まとめ（これからどのように活かしていきたいか）

花壇や植物の栽培は、余暇の趣味として男女ともに一番人気でした。植物を育てることは心の豊かさにも繋がると感じ、花が趣味だという方がいたら、一緒に育てられるようになりたいです。学校に通う途中で成長していく花の姿を見るのがとても楽しかったです。

### ○参加者からの声

花が好きだし、育てるのが大好きで参加しました。家にもいっぱい花があるし、うちでもこの花育ててみようかなとか参考になるの。最近ホームセンターでいろいろな物が買えて、このアームカバーもそこで買ったけど安かったよ。皆とも交流になるし、楽しい。



## お届けさせていただいた花の一覧



ハーベナ（赤）



ハーベナ（紫）



ハーベナ（2色）



アンゲロニア



イソトマ



ユーフォルビア



白蝶草



クフエア



ランタナ



スカエボラ



ブルーサルビア



プログラム3「花と緑のコンテスト」に参加して

小山内唯嘉 専攻科福祉専攻

○「花と緑のコンテスト」とは

「余暇活動」のうち、横内では男女共通で比率の多い余暇内容であった「園芸」活動です。ひとり暮らし高齢者の方々等に、苗の配布、自宅で育てた植物を、私たち学生の得意とするしおり作りのために育ててもらいました。一位を競わず希望者に参加してもらうコンテストです。

○参加して、参加者の反応など

私は「園芸」をしたことは一度もないので、お花を育てる楽しみがあまりわかりませんでした。訪問には訪問協力者の方がはじめにあいさつされた後、学生が説明して花を渡しました。参加者ははじめ、不安そうな表情をされていましたが、花を見ると表情が笑顔になり花の持つ力のすごさを実感しました。また、訪問協力者の方と参加者は以前から、花の交換をされていた話が多々あり、地域間の交流に花の交換によって信頼関係が構築されているように感じました。

## ○魅力と課題

園芸の経験が少ない学生と、知識の豊富な高齢者が一緒に活動することにより、学生は花の植え方や育て方を学ぶことができ、高齢者は馴染みのある園芸を楽しみながら、学生とのコミュニケーションを図ることができるという両者にとって良い影響を与えることのできる活動でした。この活動によって、普段近隣と話をした機会のない人同士が、花のイベントによって、配られた花の色や種類について話しができたことを笑顔で話されたとき、花によって交流が生まれていると感じた。一回きりの活動ではなく、継続的に行うことでより交流が促進されるのではないだろうかと思いました。

まとめ（これからどのように活かしていきたいか）

今回の活動では、福祉を学ぶ学生と地域の高齢者がかかわりを持つことができました。「園芸」は認知症予防にも有効的な活動なので、自分の祖母や近所の方々にも広めていきたい。また私たちが訪問して花を育てていただけなのは、訪問協力者の存在があったからできたことだと強く思います。地域でくらし続けるには安心できる人の存在が大事だと思いました。来年もやってねと何人もの人に言われそうなるといいなと思いました。

参加者からの声

○男性の参加者の声

- ・育てる喜びと花の美しさは心身共に癒してくれます。いただいた花大切に育てます。
- ・街並みの美観、心の浄化、花にも命があるように育つ魅力を感じる。
- ・心のいやしになります。
- ・身のまわりに花等があると気持ちが落ち着く。

○女性の参加者の声

- ・育てる喜びと花の美しさは心身ともに癒してくれる。
- ・花にも感情があり、私自身の心の表れだと思う。愛情をもって接すれば必ず応えてくれる。
- ・手のかからない観葉植物がいいと思っていたが、色のついたお花も育てて

みたいと感じた。

・何もない花が大好きで、毎朝目が覚めるとすぐに眺め、1日何回も眺めては心とませてくれ毎日が楽しくなった・お花大好き。生命力を感じる

・花は大好きで心のすきまをうめてくれる

・お花は世界共通愛されるすばらしい物です。悲しい時、苦しい時、なくてはならない宝物です。

・庭がないので家の周りは鉢植えがほとんど、毎朝家を一周するのが一日の原動力であり癒されています。

・花が咲いているのを見るとほっとします。元気になる感じです。

・一日の始まりにお花を見るのがとても心がなごみます。元気もでます。

・水やり一生懸命・・・かれちゃって・・・なごんだ。夜に話しかけた。寝るとき好きな色、いいなあと。

・いやされる・花を見ると心が穏やかになる。・花のある生活楽しいですね。

・花があると癒されます。

・私にとって園芸は子育てと同じです。大事にしすぎてもダメにしてしまうし、手をかけないと元気に育ちません。庭に花はたくさんありますが、それぞれに違うため1つ1つ観察するのが楽しみです。特に、枯れた花を元気にすることが好き。

・園芸は得意ではありませんが自然の力に感謝です。

・花に癒されている毎日です。一鉢のお花に元気をいただき剪定が遅れ二度目に咲いたときはほっとしました。

・おおげさなことではないのですが、自分の好きなものを少しずつ植えてあるのは楽しいと思います。

・手をかけるとそれ以上に綺麗に咲いてくれます。心が穏やかになります。

・自分が世話をしている植物がだんだん大きくなり、きれいに花を咲かせたときの成長過程を目にすることが魅力だと思います。

・花を見ているだけで心がいやされる。・花が咲くのが楽しみ

・四季折々に咲く花は毎日楽しみなものです。若いころは忙しくてよくわからなかったです。今では水やりが大変ですがどんな花が咲いてくれるか朝庭を

みるのが楽しみです。

・生花のあるお庭、家庭の中には全く予期できないほどの生活力を与えてくれると思っています。

・一度花が咲き終わりどうなるかな～と心配していたら又花が咲いてくれてうれしかった。

・鉢植えをお預かりして植物を育てる愛情の難しさや責任を感じました。

お日様、水やり、よそさまの花壇の手入れがよくわかりました。

プログラム4「花と緑のコンテスト・花摘み」に参加して

小山内唯嘉 専攻科福祉専攻

「花と緑のコンテスト・花摘み」とは

参加者に育てていただいた植物を学生が訪問し、しおり作成のための花を採取するためお宅に訪問しました。

○参加して、参加者の反応など

再度訪問させていただいて、笑顔で迎えてくださった。学生のために一生懸命水やりをした話や、花が咲いた喜びをお話してくださり、花を通じてたくさん話ができました。特に印象的だったのは、花を育てた時のエピソードではどんな花をもらったのか近所同士で行き来して話に盛り上がった話もきくことができました。花にも人をつなぐ力があると感じました。

○魅力と課題

活動の継続により、次への楽しみにも繋がるということがわかりました。園芸が好きな方もいれば苦手な方もいると思うので負担にならないように配慮の必要があると考えます。

○まとめ（これからどのように活かしていきたいか）

今回のような体験をまたしたいと思いました。花摘みも一緒に行うことでコミュニケーションをとることができることがわかりました。



プログラム5「花と緑のコンテスト・しおり配布」に参加して

小山内 唯嘉 専攻科福祉専攻

「花と緑のコンテスト・しおり配布」とは

育ててもらった植物を使って学生がしおりにして各参加者宅に配布しました。達成感や自己実現と学生と高齢者の方と交流ができる。

○参加して、参加者の反応など

「わーきれいだね」とほとんどの人が自分の育てた植物が綺麗なしおりになって感動している様子でした。その姿を見て喜んでもらえて嬉しかった。私たち学生も育ててくれた方のことを思いながら作成しました。

○魅力と課題

しおりにしてプレゼントするということが高齢者の方々の達成感につながっていると実感しました。プレゼントではなく、一緒にしおり作りを行うと学生も高齢者の方々との交流に結び付くのではないかと思います。

○まとめ（これからどのように活かしていきたいか）

高齢者の方々の喜ぶ姿を見て、これからも続けていきたいと思いました。自分の育ててきたお花が形を変えて自分の手元に戻ってくことでさらに達成感を味わえたと思うのでとても良い活動だったと思いました。



プログラム6「みんなの食堂 in よこうち」に参加して

齋藤静奈 専攻科福祉専攻

○「みんなの食堂 in よこうち」とは

2019年度より地域の高齢者の方等と本学の学生が、世代間交流と郷土料理の伝承を目的として取り組んでいる地域活動です。昨年は新型コロナウイルス感染拡大予防から実施することができませんでした。今年は、感染予防（体調確認、マスク、手指消毒、持ち帰り）を前提に実施しました。メニューは、家庭料理で誰でも簡単に作ることができると考えカレー（キーマカレー、バターチキンカレー、チョレギサラダ）としました。自分も作ったことがなかったので楽しみながら参加することができました。

○参加して、参加者の反応など

自分は受付を担当しましたが早く来た参加者の方が次々来る参加者の方に説明をしてくれて受付がスムーズに進みました。カレー作りの最中参加者は野菜を切る作業やフライパンでお肉を炒めたりする作業をとても手際良く行っていました。また、他の班のカレーを見に行ったりと他の班の参加者の方と交流する場面があり笑顔が多くみられました。

○そこからの課題

はじめは初対面で緊張していましたが、参加者の方から話していただき楽しい時間になりました。お米がうまく炊けない場面もいろいろとアドバイスをもらうことができました。イベントの途中お米が炊き上がるのを待つことになり、ゆっくりと椅子に座ってお話する時間がよかったですと感じました。途中で立ちっぱなしで辛くないかなど初対面では伝えにくいことも、

こちらが配慮できるようになりたいと思いました。

少しバタついてしまったので余裕をもって活動できるようにしたらいいと感じました。

○まとめ（これからどのように活かしていきたいか）

参加者が自分の班の人たちだけでなく、他の班の方とも積極的にかかわっている場面を見て、誰とでもすぐに楽しそうに会話をしていてコミュニケーション能力の高さを感じました。私はあまり人とかかわるのが得意ではないですが、参加者の方たちが積極的に話しかけてくれたのでとても楽しく活動できました。カレー作りを通して参加者の方たちは、いつもあまり話すことがない方とも話せるいい機会になったのではないかと感じました。

○参加者からの声

- ・参加者全員から「とても美味しかった」と好評でした。
- ・学生との交流で優しくしてもらえて嬉しかったしとにかく楽しかった。
- ・いつも作るものではない新しいメニューで、材料も少なくて簡単なのがよかった。若い人に手伝ってもらえるからいい。
- ・2回に分けて食べたけどとってもおいしかった。



プログラム7「チャピットお泊り会」に参加して

十文字 瀬菜 専攻科福祉専攻

「チャピットお泊り会」とは

「チャピット」は会話ができるコミュニケーションロボットです。我が国において、介護人材不足の課題から厚生労働省は介護ロボットを推奨しています。昨年に引き続き新型コロナ感染予防のため他者との交流に制限（身体的距離の確保、マスクの着用、手洗い）があり地域との交流が制限されています。そのため、介護ロボットを使い会話の促進から認知症予防、日常生活に楽しみを見いだせるような活動にしたいと思い「チャピットお泊り会」として地域高齢者の希望者に1週間無料貸し出しを行いました。

○参加して、参加者の反応など

参加してみて、「チャピット」を抱きしめ癒されている姿が見られました。みなさん笑顔になり赤ちゃんを抱いているようにも見えました。「チャピット」がシャボン玉の歌を歌った際、一緒に口ずさんでいる方や手拍子をしている方がおられ、ほのぼのとした雰囲気でした。

○そこからの課題

「チャピット」の音声認識がうまくいかず、反応がない時があった。青森県民どくどくの訛りがあるため、住んでいる地域に特化した介護ロボットを開発していくべきだと感じました。

○まとめ（これからどのように活かしていきたいか）

参加者の方は、「チャピット」にもものすごく興味を示しておられました。しかし、白くふわふわした「チャピット」は「汚してしまったり、壊してしまうのが怖い」という声も聞かれました。手軽に触っていただけるように介護ロボットに触れてもらえるようなイベントを行っていく必要があると考えました。

○参加者からの声

・すごく楽しく使わせていただきました。漫才もしてくれるし、楽しかった。朝も「おはよう」と声をかけて、出かけるときも帰ったら待っていてくれるから、帰るのが楽しみでした。愛着がわいて今日帰るよって、返す日話しかけました。





プログラム8 「花と緑のコンテストーほうきづくりー」に参加して

十文字 瀬菜 専攻科福祉専攻

「花と緑のコンテストーほうきづくりー」とは

地域の方と花壇づくりで育てた植物の中に、「コキア」というほうきに使われる植物がありました。「コキア」とは、はじめは、ほうきづくりのためとは思っていなかったが、参加者の方に、「これでほうきが作れる」と教えていただいた。

今の時代では掃除機などで掃除をするので、ほうきを目にする機会が乏しく、人の手によって簡単にほうきを作れるということを知らなく、とても新鮮に感じた。「コキア」をほうきにするには、しばらく乾燥させる必要があり、手間と時間がかかる。しかし、教えてくださる人は、手際よく「コキア」をほうきにしていく姿を見て昔の生活を教えていただく貴重な体験ができました。

○まとめ（これからどのように活かしていきたいか）

昔の生活を見せていただき、現代との生活様式が違うということに気づかされました。このような活動を通して、豊かな知識を若い世代に継承していただき、相互に地域との関係を根強くしていくべきだと考えた。

○参加者からの声

近年、ほうきを使う人・作る人が減っているけど、若い人との交流は楽しみにしている。

プログラム9「花と緑のコンテストー花壇づくりー」に参加して

原子恵 専攻科福祉専攻

「花と緑のコンテストー花壇づくりー」とは

地域のひとり暮らし高齢者等に「つりがね草の球根」を、春に向けて各ご家庭で花壇づくりしていただく活動です。また、この活動で多くの人と話すきっかけづくりになることも目的です。

○参加して、参加者の反応など

横内の方々は花を育てている人が多くとても快く参加していただきました。ほとんどの方が笑顔で「つりがね草」の育て方に興味津々でした。

○そこからの課題

地域内で共通の話題を持つことで近隣の方々との会話の材料になる一方で、身体が不自由な方などは球根をプレゼントするだけではなく球根を植えるお手伝いなど、できればいいと思いました。

○まとめ（これからどのように活かしていきたいか）

横内の方々の多くは花や野菜を育てている方が多く、球根をプレゼントした時にはそこから多くの話題につながり、たくさんコミュニケーションをとることが出来ました。このように一つの活動が大きいつながりへと変化していく事を学びました。これからは、コミュニケーションの中での話題の広げ方に活かしていきたいと考えています。

○参加者からの声

「花を育てることが好きだからうれしい」「ありがとう」「花のことでほかの人と話したよ」「癒し」など



プログラム 10「生き残り大作戦—自宅避難訓練—」に参加して

原子恵 専攻科福祉専攻

「生き残り大作戦—自宅避難訓練—」とは

横内地域では、避難訓練を積極的に行っています。中学校などでは大々的に行っている中で、現在コロナ禍であまり外部の人と関われないことや、ひとり暮らし高齢者の参加率が低いこと等の様々な課題があげられます。そんな中で、青森市危機管理課の方々に横内の起こりうる災害と対応について教えていただき、ローリングストックで、非常食をいただきました。

非常時必要な物品を高齢者に配り家の中が安全な環境となるよう確認していただく活動を行うことで実際に災害が起きたときに焦らずに対応できるように呼びかけを行う活動です。

○参加して、参加者の反応など

- ・最初は戸惑いをみせていた
- ・町内会の会長様が一緒に活動に参加してくださり、普段の会話から災害についての話をされていました。
- ・非常用袋を見ると不思議そうな顔をしていた
- ・普段の会話を交えながら会話をしていた。



○そこからの課題

今回この活動を行ってみて、実際の地域の現状を知ることが出来ました。歳を取るにつれてどうしても避難訓練に参加する機会が減っていき、実際に災害が起こった時にどのように避難してどのような荷物を持っていけば

いいのかをその場で判断するのは難しいと感じました。これらから地域全体で災害についての課題について話し合い、災害時の持っていく荷物を前もって準備することや、隣人や家族との連絡手段、近隣住民との協力が大切と感じました。災害時には地域全体で助け合い、犠牲者が出ないような取り組みを行っていくことが今後の高齢者率が高くなりつつある地域の課題だと考えます。



○まとめ（これからどのように活かしていきたいか）

災害が起きたときにパニックにならないように前もって非常用袋などを準備したり、避難時の連絡先や避難先などを話し合ったりすることが大切だと感じました。今回危機管理課の方々から伺った知識などをまずは身近な人たちと話し合い、そこから多くの人たちと改めて災害の恐怖などを知りながら、「前もって準備すること・隣人や周囲の人たちとの協力・繋がりが命を救う」を心掛けていきたいと思います。

○参加者からの声

「梅がゆ(非常食)の体験が楽しみである」「難聴の人がいるため避難訓練はありがたい」「人との関わりが増えてうれしい」「また、来てほしい」



## プログラム 11 「令和3年度青森市学生ビジネスコンテスト出場」 「チームまちゃみ」横内地区まちづくり協議会学生サポートチーム

「令和3年青森市ビジネスコンテスト」とは青森市内の大学等から選抜された6つの学生グループが独自技術、アイデア、こだわり等をもとにしたビジネスアイデアについて発表し、審査、表彰されるものです。

○プログラム1～10 の実施から、地域間のつながりが深まり、ひとり暮らし高齢者等や若い世代が、地域で安心して暮らし続けられることで孤立孤独の軽減を目的に、「世代間シェアハウス」を考えました。このシェアハウスでは、若者と高齢者の希望者が一緒に住み、庭には植物園があり沢山の植物を育てていただけます。さらに希望者は隣で「みんなの食堂－カレー屋さん－」で働くことができます。

このアイデアを「令和3年12月青森市学生ビジネスコンテスト」で発表させていただきました。

「つながりの深化」



「世代間シェアハウス」





おわりに

横内町会長に就任させていただいき、早16年目を迎えることとなります。今年も、昨年に引き続き全国的に新型コロナ感染の影響があり、これまでに経験のない不安な生活をお過ごしであったかと思います。また、地域イベントも乏しくなり、地域活動で何か交流ができないかと苦慮しておりました。私は日頃より町民の安全安心と高齢者の見守りを最優先に考えつつさまざまなイベントを考えながら活動しています。そこで、青森中央短期大学幼児保育学科専攻科福祉専攻の学生が、横内地区まちづくり協議会学生サポートチームとして感染対策した上で地域活動をしてくれました。これからも地域の皆様には、できる限り安心した暮らしやすい街づくりを考えていく所存でございます。これからも何卒よろしくお願い申し上げます。

横内町会長 太田 智三

編集担当： 齋藤雅美

発行日： 20 2 1 . 12. 1 0

協力： 小山内唯嘉、齋藤静奈

イラスト： 阿保真弥花、原子恵

写真： 十文字 瀬菜

発行： 青森中央短期大学

〒 030 - 0132

青森県青森市大字横内字神田 12 番地

tel:017-728-0121

Fax:017-738-8333

協力： 青森市消防本部

青森市危機管理課

社会福祉法人温和会特別養護老人ホーム朝光苑

有限会社サン・ショウ サングループホーム横内

土土舎花花舎

横内まちづくり協議会

横内町会

(順不同)

製版 / 印刷： 長尾印刷株式会社

